

W-1-1 天草市本渡方言における呼びかけのイントネーション

Calling intonation in the Hondo dialect of Amakusa Japanese

松浦 年男 (北星学園大学) yearman@kyudai.jp

1. 背景

1.1. 目的

本研究は、熊本県天草市本渡方言（以下、本渡方言）呼びかけイントネーションの音声的実現を記述し、2つのパターンがあることを示す。その上で、これら2つのパターンが言語表示のさまざまなレベルでの指定がどう異なるのかについての考察し、呼格として辞書的指定を持つタイプと、そういった指定を持たないものという違いであると主張する。

1.2. 天草方言の概況

方言区画では熊本県の方言は北部方言と南部方言に二分される。その上で南部方言の1つに天草諸方言がある。天草地方は上島と下島からなる。言語的には、上島全体と本渡地区を中心とする下島の北部、牛深地区を中心とする南部という2つに分かれる。

北部方言と南部方言の違いのひとつにアクセントを挙げることができる。両方言とも下降調のA型と非下降調のB型という2つの音調型が対立する二型アクセント方言であるが、下降型の音調型に違いがみられる（上村 1972, 松浦 2021/印刷中）。北部方言ではA型の音調型は3モーラ以上のアクセント句では第2モーラにピークがあるのに対して、南部方言では下降という特徴だけがあり、固定されたピークを定めることが難しい。例えば深海方言では次末モーラにピークがあるように思えるが第2モーラにピークがある語も外来語を中心に多く見られる。

(1) A型の音調型（「花」）

北部(本渡)：ほな, はなが, はなから, はなからも

南部(深海)：ほな, はなが, はなから, はなからも

もともと南部方言において下降の位置がランダムに決まっているわけではない。松浦(2021/印刷中)は牛深、深海、浅海の3地区のA型の音調型について、北部同様、第2モーラにピークが多いが、音節構造の影響を受けることを指摘している。

1.3. 諸言語の呼びかけ形式

諸言語で呼びかけと呼ばれる形式は *vocative* や *calling* と名づけられる。この実現方法は多様で、例えば Daniel and Spencer (2009) は *vocative* を(2)のように定義しており、どのような実現方法かについては限定していない。

(2) Daniel and Spencer (2009)による *vocative* の定義

[A] case used as a form of address, i.e. calling for the addressee's attention by naming them in an explicit way.

いくつかの言語の実現方法を採り上げよう。

(3) 呼びかけの実現方法

- a. ラテン語（形態の変化, 第2変化名詞のみ）
Brutus. (主格)→ Et tu, Brute! (呼びかけ)
- b. 韓国語（形態の付加）
현수. (ヒョンス・平叙文)→현수야! (ヒョンスヤ!・呼びかけ)
- c. ニヴフ語（形態の付加）
at'ik (弟) → at'aa (弟・呼格)
- d. チュクチ語（強勢の変化）
kávav (固有名) →kaváv (呼格)
類例：Shipibo-Conibo, サンスクリット語
- e. Ngiti（音調の変化）
iyamá (私の母) →iyamā (私の母・呼格)

日本語諸方言では呼びかけは音調の変化で行う。窪菌ら(2018)で報告されたパターンをもとに記述する。多型アクセント体系の東京方言では呼びかけは3種類の音調が見られるが、アクセントの型の中和は見られない。二型アクセント体系の鹿児島方言では呼びかけは2種類で、2つの型の対立を中和する。また、B型では呼びかけと疑問のイントネーションが中和する。一型アクセントの小林方言では、通常アクセントはアクセント句（文節）の末尾にピークが見られるが、呼びかけでは末尾音節が長くなり下降が見られるようになる。

(4) 諸方言の呼びかけイントネーション

- a. 東京（多型）
起伏：ナオヤ, ナオヤ!, ナオヤー!, ナオヤー!
平板：ナオミ, ナオミ!, ナオミ!, ナオミ!
- b. 鹿児島（二型）
A型：ナオヤ, ナオヤ!, ナオヤー!, ナオヤ?
B型：ハルオ, ハルオ!, ハルオー!, ハルオー?
- c. 小林（一型）
ナオヤ, ナオヤー!, ナオヤカ?

以上の結果をまとめると(5)のようになる

(5) 呼びかけのパターンの整理

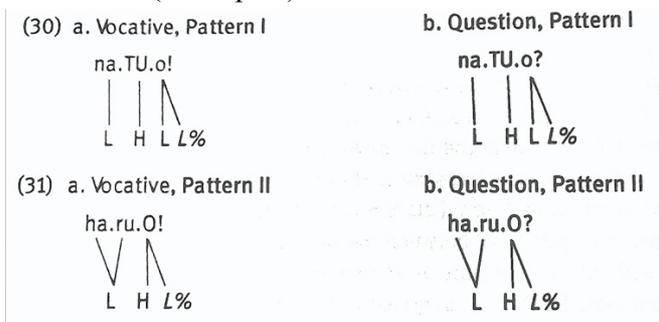
	東京	鹿児島	都城
体系	多型	二型	一型
文末下降	△	○	○
パターンの数	3	2	1
母音延長	△	△	○
中和	なし	あり	---

Daniel and Spencer (2009)や Sonnenhauser and Noel Aziz Hanna (2013)でもイントネーションやプロソディが呼びかけとして用いられる方法としては一般的であることを指摘している。日本語諸方言の例はまさにこれと合致していると言える。その一方で、言語学的な位置づけ、すなわち、基底形

でどのような指定がなされているのか、例えば東京方言や鹿児島方言の複数のパターンはどういった指定を、どこでなされているのかということについては、まだ検討が進んでいるとは言いがたい。

その中で Kubozono (2018)は鹿児島方言の呼びかけや疑問表現のイントネーションについて自律分節音韻論の枠組みを用いた記述を出しており、呼びかけのイントネーションが post-lexical のレベルだとして、最終モーラに L%メロディが結合するとしている。こういった分析の適用可能性を他の方言についても検討することが必要だろう。

(6) Kubozono (2018: p.52)



以下第2節では、本渡方言における呼びかけのイントネーションについて行った調査の結果を報告する。そして、2つのパターンが見られることを指摘する。その上で、2つのパターンの言語学的な位置づけを検討し、中和を起こすパターンは形態素として呼格に結びついているという分析案を提示し、中和を起こさないパターンはパラ言語的な情報である可能性を指摘する。3節はまとめと今後の課題である。

2. 本渡方言の2種類の呼びかけ表現

2.1. 調査

本研究の話者は男性1名である。以下に情報を示す。木部(2011)や松浦(2021/印刷中)と同じ話者であり、代表性の面では問題ないと考ええる。

(7) 話者情報

1941年生まれ、男性、天草市本渡町（旧本渡市）で言語形成期を過ごす

調査はに話者自宅にて行われた。録音機は Zoom 製 H5 を使用し、マイクは AKG 製 C520 を使用した。

調査では発表者から人名や呼びかけに使える名詞（例：校長先生など）を提示し、答えてもらった。録音の回数は表現によって異なるが2回から4回程度だった。

2.2. 呼びかけに見られる2つのパターン

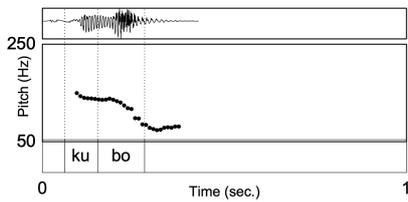
調査の結果、「相手が見えるか」によって2つのパターンが現れた。以下、「相手が見える」ときの形をパターン1、「相手が見えない」ときの形をパターン2と呼ぶ。Daniel and Spencer (2009)によれば、呼びかける相手が見えるかどうかで異なるパターンを取るの Hualapai にも見られるという。

2つのパターンは、音調型とアクセント型の中和の面で異なる。パターン1は末尾に上昇下降調が見られる。また、アクセント型は中和する。それに対してパターン2は末尾に上昇調が見られる。

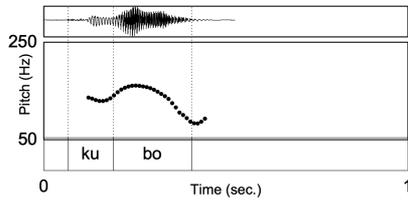
また、アクセント型の対立は保たれる。(8)に通常の形式と2つのパターン呼びかけの形式のF0を示す。

(8) 2モーラにおける呼びかけのF0

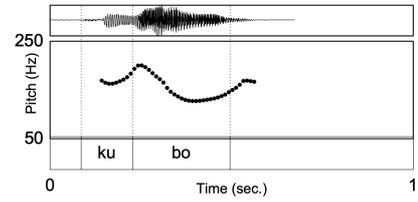
久保 (A型) 通常



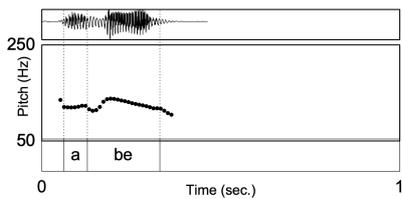
呼びかけパターン 1



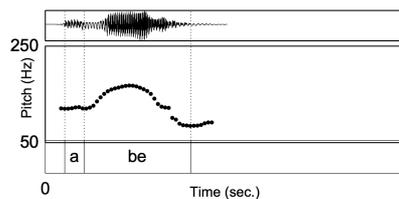
呼びかけパターン 2



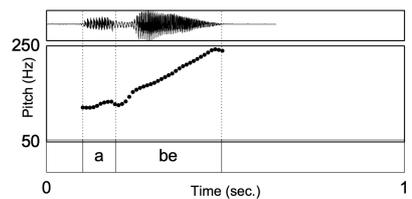
阿部 (B型) 通常



呼びかけパターン 1

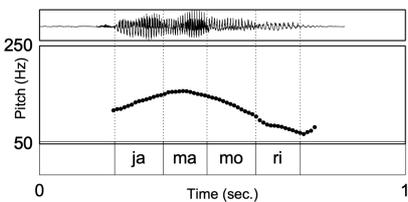


呼びかけパターン 2

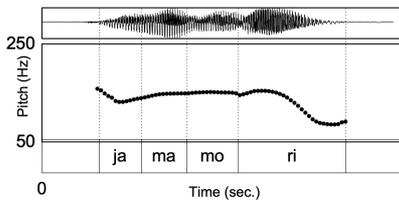


(9) 4モーラにおける呼びかけのF0

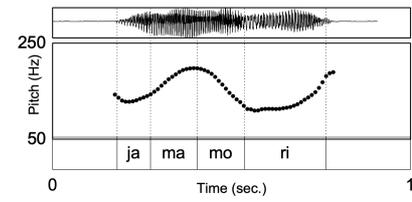
山森 (A型) 通常



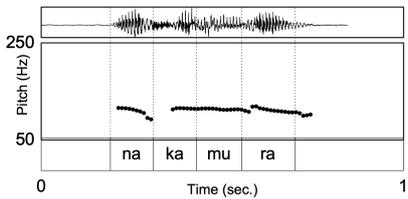
呼びかけパターン 1



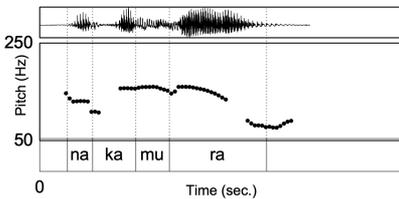
呼びかけパターン 2



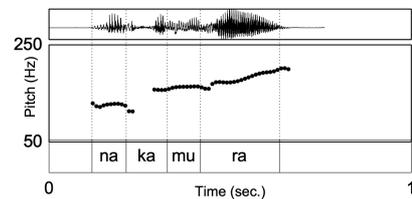
中村 (B型) 通常



呼びかけパターン 1



呼びかけパターン 2



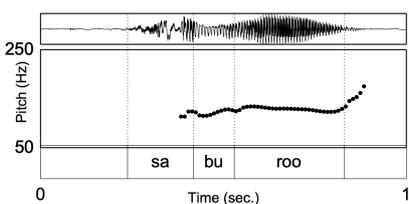
末尾のモーラでは延長が見られる。この延長の長さを見ると、短いA型の語ではパターン1が長くなる傾向が見られた(例外あり)。

2.3. 末尾が重音節(長音, 撥音)の場合

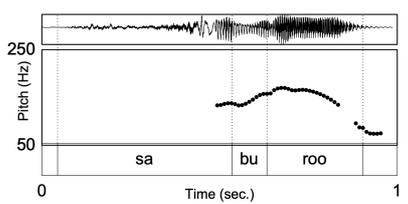
末尾が重音節の場合のF0の実現を見てみよう。まず長音終わりの場合、パターン1もパターン2も末尾の長さはほとんど変わらないが、呼びかけの場合は/s/の時間長が長く取られている。

(10) 長音終わりの場合のF0の実現

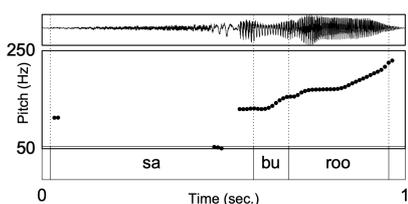
三郎 (B型) 通常



呼びかけパターン 1



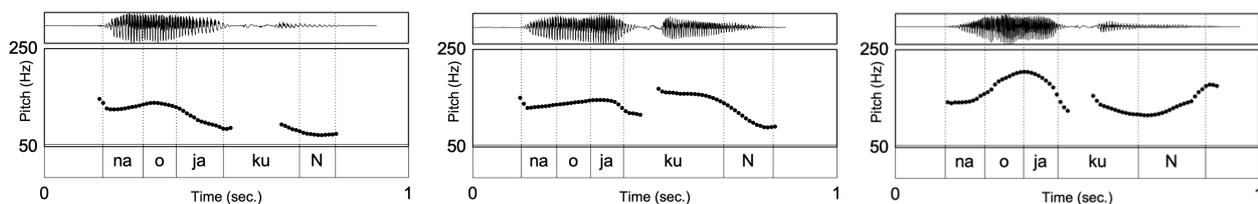
呼びかけパターン 2



撥音終わりの場合、全体では長くなるが、それが母音か/Nかは一貫していない。

(11) 撥音終わりの場合の F0 の実現

直也くん (A型) 通常 呼びかけパターン 1 呼びかけパターン 2



(12) 時間長の比較

		CV	N	N の割合
直也くん	中立	209	98	0.32
	パターン 1	275	135	0.33
直美ちゃん	中立	250	116	0.32
	パターン 1	205	123	0.38
純	中立	186	122	0.4
	パターン 1	209	214	0.51

2.4. 音韻分析

パターン 1 について、末尾の延長する単位がモーラなのか音節なのかははっきりしない(直也くん vs. 純)が、延長が 1 モーラ分で、それ以上延びることはない(調査した話者の感覚としても)。このことから、パターン 1 は形態素として 1 モーラ分の指定があると考えられる。もう少し詳細に述べると、呼びかけという機能に対応する形態素なので「呼格」(vocative)という指定を持つと推測する。

この形態素は分節音としては空で、1 モーラの指定と、韻律語の左端に L、右端に H+L という指定を持つ。モーラの結合は末尾の音韻構造によって実現が変わってくる。軽音節の場合、最終モーラの母音に 1 モーラ付加されて、結果として長母音となる。末尾が撥音の場合、1 モーラが付加されるが、それが母音なのか、/N/なのかは今のところ自由変異としか言えない。ここについては例えば母音の種類による違いがあるのかなど検討が必要だろう。最後に調音の場合、3 モーラ音節の回避のため、モーラは付加されず、浮遊物消去(stray erasure)ないしは Max 制約が 3 モーラ音節回避のための制約 (*[μ μ μ]₀) より下位にあるため実現しないと考えられる。

パターン 2 ではトーンは中和せず、末尾が語彙的な HL の H よりも高くなった。また、末尾の音は言語構造と関係なく延長する傾向が見られた。このように言語的な制約を受けずにいることから、これは形態素の実現ではなく、言語外的な情報、例えばパラ言語的な情報によるものだと考えられる。パラ言語的な情報とは、話し手による情報伝達のモデルにおいて、語彙や構造といった言語メッセージではなく、「確信」や「疑念」などといった抽象的なカテゴリーによってある程度の記述が可能なメッセージである(森ら 2009)。

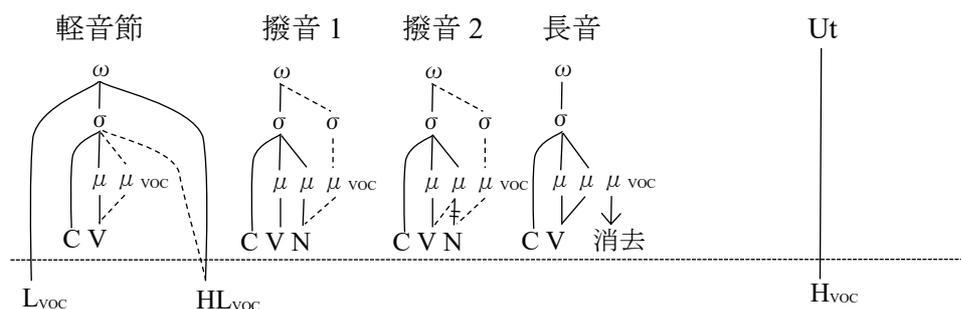
この場合、音調だけが重要ならば、「んー」のようにほぼ意味のない分節音だけでも意図を受け取ることが可能なはずで、その点の検証が必要だろう。ただし「んー」で呼びかける状況をうまく想定してもらえるかは分からない(例えば口にもものが入っているときに人を呼ぶとか)。前川(1997)の指摘するように、パラ言語的な情報をどう言語学的情報に結びつけるのかは大きな課題であるが、今のところは韻律階層上一番上位の Utterance に結びつくと考えておく。

以上の考察によるパターン 1 の指定、派生を(13)に示す。

(13) 本渡方言の呼びかけパターンの指定

パターン 1 (撥音, 長音の音調は省略)

パターン 2



3. 結論

本研究では天草市本渡方言の呼びかけのイントネーションについて報告した。本渡方言の呼びかけには2つのパターンが観察されることを示し、その違いが形態素として指定されるか、パラ言語的な情報であるかの違いだという分析を示した。

本研究の分析は生成過程(派生)が精密化されていない点やF0の音響音声学的記述などに問題が残る。また、「待て!」のような動詞の命令でも強く呼びかけている。こういったものとの区別があるのかなど、検討すべき問題が残っている。

謝辞 本研究は以下のプロジェクト・研究費による研究成果の一部です。国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」、同「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」、JSPS 科研費 Nos. 20K00578, 19H01262, 19H00530, 17K92689, 17H02332。

参考文献

- 秋山 正次 (1983)「熊本県の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』207-235. 東京: 国書刊行会.
上村 孝二 (1972)「天草島方言のアクセント」『鹿児島大学 文学科論集』7, 1-19.
窪菌 晴夫・溝口 愛・平田 秀 (2018) 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ「日本語の呼びかけイントネーション」
前川 喜久雄 (1997)「音声によるパラ言語情報の伝達: 言語学の立場から」『日本音響学会平成 9 年度秋季研究発表会講演論文集』pp.381-384.
松浦 年男 (2021/印刷中)「天草諸方言における音調型と複合名詞アクセントの中和」『筑紫語学論叢 3』, 東京: 風間書房.
森大毅, 前川喜久雄, 粕谷英樹 (2009)『音声は何を伝えているか: 感情・パラ言語情報・個人性の音声科学』東京: コロナ社.
Daniel, Michael and Andrew Spencer (2009) The vocative: An outlier case. In: Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford Handbook of Case*.
Sonnenhauser, Barbara and Patrizia Noel Aziz Hanna (2013) Introduction: Vocative!. In Sonnenhauser, Barbara and Patrizia Noel Aziz Hanna (eds.) *Vocative! Addressing between System and Performance*. 1-23. de Gruyter Mouton.